

アングレーズ

―その後のことは、彼は余り語りたがらなかった。ただ、私から聞いたのは、彼が物乞いをしながらペシャワールをうろついていたということだけである。故郷のクナールにはもう帰らなかった。

こうして、またペシャワールで何年かが過ぎた。一九六八年のある日、ミッシヨン病院で、ジュザームの治療をする所が出来た、と噂に聞いた。「アングレーズ（英国人）」の病院だが評判が良かった。ペシャワールの人々はアングレーズでも、いい人ならば構いはしない。サタールも、長いペシャワールでの生活で多少は抵抗がなくなっていたので、思い切って訪ねてみた。

おそろおそろ会った「アングレーズの医者」は、サタールの異様な容姿も、薄汚い物乞いの姿も意に介さないようだった。流暢なウルドゥ語で、ちゃんと治療すればこれ以上は悪くならないから、と丁寧に説明して、膿だらけの傷を手当してくれた。サタールは涙がこぼれた。おそらくこれが、彼が故郷を出てから初めて受けた親切な態度だったからである。

案内された病棟には、同じジュザームの患者たちが入院して治療を受けていた。パキスタン人のスタッフがこざつぱりとした身なりで、ときばきと病院の説明をし、薬を続けてのむこと、手や足の傷に気をつけ、何かあったらいつでも病棟にくることを説明してくれた。

一九七五年に、「別のアングレーズ」のグループがらい病棟にきた。アングレーズにもいろいろあって、ベルギーという所から来たらしい。ともかくよく分からぬが、非常に献身的で、カーファイル（異教徒）とも思えない。「イスラムの兄弟」は自分に何をしてくれたのだろう。このカーファイルたちは、本当はムサルマン（イスラム教徒）に違いない、とも思ったりした。彼らはサタールの物乞いをやめさせ、らい病棟の門衛として雇用した。「神は大変お喜びになります。（喜捨を）」などと言って、もうバザールで屈辱的なお貰いをする必要はなくなった。初任給は四〇〇ルピーで、まずまずだった。

五〇ルピーでスラムの一角に家を借り、数年後には貯めた金で女を娶り、一家を構えることが出来た。職務には忠実で、一度も遅刻した事はなかった。

